

〈史料紹介〉

東京感化院関係史料集 (17)

古宇田 亮 修

はじめに

当研究所では、平成一六年（二〇〇四）六月より社会福祉法人・錦華学院の所蔵史料調査をおこなってきた。その調査において、錦華学院の前身であり、日本に二番目に開設された感化院である東京感化院にまつわる一次史料を多数確認のうえ、整理、撮影することができた。以来、研究所では『感化院事業の社会史的研究』（平成一七〜一九年度）、『東京感化院の総合研究』（平成二〇〜二二年度）という課題目で共同研究班を組織し、日本私立学校振興・共済事業団の学術研究振興資金の交付を受け（平成一七〜二〇年度）、その全容解明に向けて研究を進めてきた。これら史料のうち、院の運営を知る上で最も重要とみなされ、また全体の分量の約五五%あまりを占める日誌類全四一冊については、『東京感化院関係史料集』（1）〜（14）、二〇〇六〜一〇年）において、翻刻を公開した。そして、『東京感化院関係史料集』（15）（二〇一〇年）では、規則類を収録した。また、『東京感化院関係史料集』（16）（二〇一一年）では、『東京感化院月報』の一号から三二号のうち、錦華学院において欠本となっている八冊を除いた二三冊を翻刻して収録した。

今回は、それに引き続く三二号より五五号のうち、欠本となっている四九号と五二号を除いた二二冊を復刻収録するのである。なお、現存する『東京感化院月報』の概要（二号〜六六号）は、『東京感化院関係史料集』（16）に一覧表を収録したので、そちらに譲ることとする。

先に述べた日誌類を感化の現場で記された一次史料とすれば、本稿で紹介する『東京感化院月報』は、院の運営者らの意向によって編集され、院生の保護者や院の後援者に向けて発行されていた活字史料であり、純然たる一次史料とは言いがたいものである。しかし、感化事業の現場の記録である日誌類は、院内での運営に関わる事実の記録を中心とするのに対し、この『東京感化院月報』には、運営者の感化事業に対する見解や思想が述べられているという点で、東京感化院の全体像を知る上では、他からは得られない情報の宝庫である。

また、当研究所の研究員である長沼友兄氏は、長年の資料調査の末に、東京感化院の開設者である高瀬真卿に関する資料群が高瀬家の御子孫宅に保管されていることを確認した。そして、それらは現在、淑徳大学アーカイブズに寄贈・保管されるに至っている。その目録は、当研究所の「高瀬真卿関係資料の研究―社会福祉分野を中心に」研究プロジェクト（平成三三年度）において作成中であり、次年度中の完成を目指して作業を進めているところである。このうち、高瀬真卿自筆の日記全二八冊は、今後の高瀬真卿研究のみならず、感化院史の研究にも裨益する一次史料と考えられる。現在、その翻刻出版が淑徳大学アーカイブズにおいて進行中（二冊が刊行済。日記一〇冊を収録）であり、完結の折には、東京感化院内の史料と高瀬真卿日記を対照した研究の進展が見込まれよう。

なお、前回までは史料の翻刻を公開してきたが、近年のコンピュータ技術の飛躍的進歩により、DTPによる画像処理が容易となったため、今回よりデジタル画像を復刻収録することとした。史料の撮影は、株式会社ニチマイの協力のもと、

四〇〇dpi、モノクロ二階調の設定でおこなわれた。すなわち、グレイスケール撮影の場合とは違って今回の複製では階調表現を欠いているが、これによりコントラストが高まったため、文字については原本以上に鮮明になったという利点が生じた。なお、複製に当たり、プライバシー保護のため、原文の一部に伏字(■)を使用した。また、原文の一部に現在の人権上の観点からすると不適切な表現があるが、史料の歴史的価値に鑑み、原文通りとした。

今回、複製を収録する二二冊の月報は、明治三十七年(一九〇四)五月より明治三十九年二月の二年半にわたる時期の発行であり、編輯兼発行者は岡西繁三郎、発行所は羽澤文庫である。この時期の月報では、第二代院長高瀬紹卿による寄稿のほか、一〇年余りにわたり東京感化院に勤務した清水孝教(号は橋村)の論説が度々掲載されている。水戸市根積町出身の清水孝教(一八七九～一九六五)は、一般には、詩人(清水橋村)、刀剣鑑定家、占術家(高木乗)としての著作で知られているが、当史料により、彼はこの時期の月報の執筆・編集の中心を担った人物であったことが解る。⁽⁴⁾今後、彼の感化教育家としての側面を、当史料から検証・再評価することが可能となるであろう。

(当研究所専任研究員)

註

- (1) 詩集に、以下のものがある。『野人』東北図書出版会、一九〇一年。『新体詩集 筑波紫』日高有倫堂、一九〇八年。『社会詩集 鴉の蒔いた草花』シイヴァン社、一九五四年。詩人としての清水橋村については、小野孝尚氏による以下の研究に詳しい。「清水橋村研究」『茨城女子短期大学紀要』二四、一九九七年。「清水橋村研究(その二)」『茨城女子短期大学紀要』二五、一九九八年。「清水橋村研究(その三)」『茨城女子短期大学紀要』二七、二〇〇〇年。「清水橋村研究(その四)」『茨城女子短期大学紀要』二八、

- 二〇〇一年。「清水橋村年譜試案」『茨女国文』一一、一九九九年。『茨城の近代詩人』（上）、筑波書林、一九八六年。『詩人・清水橋村』茨城文化振興財団助成出版、二〇〇一年（未見）。
- (2) 中でも、『刀剣全書』日高有倫堂、一九一一年は、版を重ねた書として有名である。
- (3) 比較的早い時期のものとして、『冢相方鑑全書』春江堂、一九一四年がある。晩年には、占術に関する書籍を多数著している。
- (4) 清水は、『東京感化院月報』第三九号（明治三八年一月）においては、「東京感化院羽澤文庫」担当として賀詞広告を出しており、第四八号（明治三九年一月）には、高瀬紹卿、高瀬真卿、岡西閑亭と共に連名で賀詞広告を出していることから、この時期における院内での地位の上昇がうかがわれる。